

76. <海外で学ぶ>

10月下旬にJ S 技術開発部の若手職員がシカゴで開催されたWEF（水環境連盟）の発表会の参加し、ついでにイリノイ大学を訪問しました。イリノイ大学（アバーナ・シャンペイン校）は、今年の全米大学ランキングでは、土木分野で1位、環境分野では2位（1位はスタンフォード大学）という大学です。私も、20年前にJ S からイリノイ大学に派遣され、1年半の学生生活を送らせていただきました。

環境工学科の修士課程に入りましたが、学生ですので、授業に出席し、宿題をし、レポートを書きという毎日です。J S の業務に慣れてきたころでしたので、戸惑いました。授業は、当然ながら英語です。最初は、何を話しているのか分かりません。質問されても、質問の意味を考えている間に、次の学生に回ってしまいます。しっかり予習をすることで、何とか授業についていけるようになり、最初の学期が終了するころには、それなりに理解できるようになりました。水道、下水道の授業はもちろんですが、基礎科目である生化学や微生物学、ごみ処理工学などの授業も受けました。ごみ収集車の最短ルート決定手法である、「中国の郵便配達夫の手法」などは面白く聞きました。

学生は留学生が半数を占め、ヨルダン、ギリシャ、コロンビア、ユーゴスラビア、韓国、中国など多彩でした。特に、天安門事件の直後でしたので、中国人留学生が目立ちました。私も、家内と子供1人を連れて行きましたので、よく中国人と間違われました。1度就職してから、再度学生になるアメリカ人も多く、休日には子連れで大学に来る人も結構いました。また、夜遅くまで実験するという事はなく、定時には帰宅という学生が大半でした。修士論文を書いているころは、子供を寝かしつけてから大学に戻って論文を書く、という生活だったのですが、そのような学生は皆無で、夜中に回ってくる掃除人から「掃除の邪魔なので早く帰ってくれ」と言われたことがあります。

冬はマイナス40度、夏は40度近くになる厳しい気候、とうもろこし畑と大豆畑に囲まれた田舎町。20年も前のことですが、つい最近のことのように思い出します。

この11月から、J S 技術開発部の職員が、ドイツのアーヘン工科大学へ1年間の研究生生活のために旅立ちます。国は違いますが、良い経験をして欲しいものです。

< 藤本 裕之 >

※ J S 技術開発情報メール No. 84 号(2008/11/6)に掲載